

## 検温、体調管理、交通安全

学校が再開し、分散登校のため2回目の登校となった日の朝、校門付近で聞かれた呟きに「あれ？ 今日もあるの？」「今日もやってる」というものが少なからずありました。朝の検温のことです。呟いた生徒たちは、学校が再開される初日にのみ行われるものと思っていたようです。新型コロナウイルスに対する県のガイドラインによる危険度が下がったとはいえ、まだ「2」の段階です。気を緩めて安心できる状況ではありません。東京では、「東京アラート」が発動され、注意が呼びかけられています。校舎へ入る前の検温はしばらく続けられます。

この呟きと合わせて心配になったのは、自宅での検温を毎日行ってもらえているかということです。中断していないでしょうか？ 朝と夕、少なくとも1日2回は検温し、「健康観察記録表」に記入してください。また、先日もお伝えしたように、6月からは県の「学校再開に向けたガイドライン（改訂版）」に基づき、「同居の家族にも検温や体調確認をしていただき、何か変わったことがあれば学校に伝えてもらう」ことになっていますので、ご協力をお願いいたします。

さらに、梅雨入りも間近となってきました。登下校時の交通安全にも一層の注意をお願いします。慣れてきたところでもありますが、余裕を持った登下校を心掛けてください。

## 日々の生活の中から社会について考えよう

アメリカ合衆国の都市ミネアポリスで黒人男性が白人警察官によって拘束死させられた事件をきっかけとして、各地で抗議デモなどが起きています。「社会の分断」は、今、大きな問題の一つになっています。新型コロナウイルス感染症は、社会のひずみをこれまで以上に強くあぶり出しているようです。こうしたこともあって、今回は、**ブレイディみかこ**さんの『**ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー**』（新潮社）を紹介します。昨年「Yahoo!ニュース | 本屋大賞2019ノンフィクション本大賞」を受賞した本です。著者は福岡市出身で、現在はイギリスで暮らしています。この本は、アイルランド系のパートナーとの間に生まれた一人息子が、「元・底辺中学校」に通い始めた最初の1年半を書いたものです。

舞台は、ロンドン中心部から南へ80kmほどの海岸地帯にある都市、ブライトン。「海岸沿いに流行りのヒップなクラブが建ち並び、週末になるとロンドンから多くの若者が遊びに来る」ブライトンは、「英国でもLGBTの人々

が多く住んでいることで知られている」都市でもあります。海岸リゾート、観光都市という明るいイメージのある街ですが、EU離脱派と残留派、移民、階級、貧富、高齢者と若年層など、多くの分断と対立の深刻化は、この街においても例外ではありません。

小学校時代は名門のカトリックの学校で過ごした息子が進学した中学校は、意外にもカトリックの学校ではなく、「元・底辺中学校」。「上品なミドルクラスの学校ではなく、殺伐とした英国社会を反映するリアルな学校」で、「いじめもレイシズムも喧嘩もあるし、眉毛のないコワモテのお兄ちゃんやケバい化粧で場末のバーのママみたいになったお姉ちゃんたちもいる」学校でした。こうした学校などにおける多様な人との関わりや、母と子が日々の生活にしっかり向き合う場面の数々を通して、イギリスや我が国の社会が抱える問題や、教育事情などが浮き彫りになってきます。

いじめに対しても、「一人一人はいい子なのに、みんな別人になって、どこまで行くんだろうって、胸がどきどきした」という描写とともに、「僕は、人間は人をいじめるのが好きなんじゃないと思う。……罰するのが好きなんだ」「自分たちが正しいと集団で思い込むと、人間はクレージーになるからね」と、読む側がハッとさせられる言葉が続きます。

印象に残った言葉に「シンパシー(sympathy)」と「エンパシー(empathy)」があります。同情や共感のような意味で両者は似ていますが、違うといえます。「シンパシー」は、共鳴や哀想などのようにあまり自分で努力しなくても出てくる感情的なものです。自分が相手と同じ立場だったらというように、意識の対象は「自分」に向けられている場合もあると思います。これに対して、「エンパシー」は他者を想像する「能力」「スキル」で、相手の関心に関心を持つことのように、自分と違う理念や信念を持つ人に対して、どうしてこう思ったんだろうと想像する能力のことを言うようです。意識の対象はあくまでも「相手」であり、相手を尊重し、相手に関心を向ける能動的な営みです。

我が国でも多様性を尊重する気運がある一方で、誹謗中傷の例に見られるような、自分とは異なる他者に対する攻撃も問題となっています。数が多いか少ないかということと、そのことが「正しい」か否かは別のことであり、あるいは、多様なことは一見すると不安定のようにも見えますが、実はとても安定した状態であるともいえます。日々の生活の中から社会や世界を考える材料は見つけられます。